

ジョイセフ・パートナーシップ・プログラム(JPP)



ジョイセフ
JOICFP



途上国の妊産婦と女性を守る

ザンビア 農村地域における妊産婦支援プロジェクト2013年報告書



ザンビアの妊産婦のより安全な妊娠と出産を推進するために

< 状況 >

ザンビアの農村地域では、妊婦の約 7 割が、不衛生な環境の中、医師や助産師の介助を受けずに自宅を出産しており、母体に異変が起きても治療を受けられず、多くの妊産婦が出血多量などで命を落としています。保健施設までの遠い距離、保健施設に行っても陣痛が始まるまで体を休めるスペースが整備されていないこと、助産師の介助や施設分娩の大切さが村人に十分に理解されていないことなどの課題が挙げられていました。

< 2013 年の活動ハイライト >

コミュニティの参加によりマタニティハウス（出産待機ハウス）第 2 号が建設されました。プロジェクト最終年である 2013 年には、ザンビアの最も大きな課題である保健施設までの距離を縮めるために、マタニティハウス第 2 号をプロジェクト地区のムコルウェ村に建設しました。これにより、ムコルウェ村の妊婦さんは、陣痛が始まってから保健施設まで何時間も歩くのではなく、出産予定日の 2 週間前からマタニティハウスに滞在して、訓練を受けた医療従事者のもとで安心して出産ができます。マタニティハウス第 1 号同様に、建築家の遠藤幹子さんによるデザイン・設計協力のもと、母子保健推進員 (SMAG) の参加によるペインティングワークショップを開催。また、145 名の SMAG を対象に行動変容に向けた IEC/BCC 教材を活用した研修を開催しました。

プロジェクト概要

目的：

ザンビア農村部であるプロジェクト地区において、介助が受けられる保健センターの出産を増加させ、より安全な妊娠や出産を推進する。

プロジェクト期間：

2011 年～ 2013 年

現地協力団体：

IPPF ザンビア（ザンビア家族計画協会 [PPAZ]）

対象地域及び人口：

ザンビア国コッパーベルト州マサイティ郡フィワレ地区
1 万 7 千人
マサイティ郡
12 万人（対象地域の出産可能年齢（15 ～ 49 歳）の女性）

支援協力：

Cath Kidston / 株式会社ファーストリテイリング(ユニクロ) / その他企業・団体・個人からの寄附 / 公益財団法人 JKA / 国際家族計画連盟 (IPPF)

プロジェクト地区：
コッパーベルト州マサイティ郡



2013 年の活動

1) 母子保健推進員 (SMAG) の育成*

- a) SMAG 145 名を対象に意識や行動を変えるためのコミュニケーション研修
b) SMAG 10 名を育成

これまで育成した 145 名の SMAG メンバーおよび 4 名の保健センターのヘルススタッフを対象に、妊娠・出産に関する意識や行動を変えていくためのコミュニケーション教育に関する研修を実施。ジョイセフからリプロダクティブヘルス用教材のマギーエプロンと妊娠シミュレーターを紹介しました。教材を活用し、妊娠の仕組み、胎児の発育、家族計画などをテーマに、グループに分かれて正しい情報を身に付ける学びを実践してみました。また、妊娠シミュレーターは、妊娠を擬似体験でき、男性参加を促すツールとして、マギーエプロンと組み合わせて活用できます。視覚的にわかりやすいツールを用いることで、参加者とのディスカッションを活性化させ、村での啓発教育活動が強化されました。また、ムコルウェ村にマタニティハウスが建設されることに伴い、10 名の SMAG メンバーを育成しました。保健施設での出産を促し、マタニティハウスの運営管理強化のため、この地域にて SMAG の取り組みが根付いていくことを目指しています。



マギーエプロンを活用し、産前ケアについて討議する SMAG 参加者



家族計画をテーマにマギーエプロンを活用し実演

2) フィワレ保健センター母子保健棟改築と出産に必要な備品キットの提供*

外務省の草の根・人間の安全保障無償資金協力のもと、フィワレ保健センターの母子保健棟の改修・増築を行い、8 月に開所式を開催しました。2011 年にマタニティハウスが建設されてから、保健センターでの出産件数も増加。改修により分娩室が拡張されたことにより、入院スペースは倍増し、入院ベッドや分娩台、医療機器も整備されました。また、出産に最低限必要な備品キット (消毒液、ゴム手袋、産後用ナプキン、コットンなど) 1000 セットをフィワレ保健センターおよびムコルウェ診療所に寄贈しました。さらに安全で質の高い出産サービスが受けられるように整備されました。



外務省草の根・人間の安全保障無償資金協力のもと、保健センター母子保健棟の改修・増築

3) ムコルウェ診療所にマタニティハウス第 2 号を建設

ムコルウェ診療所の隣にマタニティハウス第 2 号が建設され、これまで自宅出産や約 28 キロメートル離れたフィワレ保健センターまで歩いて来ていた女性たちにとって、出産予定日の 2 週間前からマタニティハウスに滞在し、訓練を受けた医療従事者のもと、安心して出産できる環境が整いました。マタニティハウス第 2 号は、第 1 号と同様に建築家の遠藤幹子さんによるデザイン・設計の技術協力のもと、日本から再生自転車などの物資を送る際に使われたコンテナを活用して建設され、ハウス内には 4 部屋、キッチン、ラウンジ、シャワーとトイレが設置されています。外壁には母子保健推進員 (SMAG) が安全な母性 (Safe Motherhood) をテーマにイラストを描き、とても素敵な仕上がりになりました。2013 年 11 月の開所式には、200 名程度の村人が集まり、開所式の様子がザンビアの新聞やテレビなどでも取り上げられ、プロジェクトの活動を広報する機会となりました。

また遠藤幹子さんが講師となって、10 名の SMAG メンバーを対象に、マタニティハウスの設計についての 1 日ワークショップを開催しました。模型を用いたり、設計のポイントについてとてもわかりやすく遠藤さんから伝授され、SMAG メンバーをはじめ、プロジェクト関係者にとって大きな学びとなりました。

* 母子保健推進員 (SMAG) の育成事業、及び出産に必要な備品キットの提供は、公益財団法人 JKA の競輪の補助を受けて実施しました。



住民参加型ペインティングワークショップ



コミュニティの人たちも参加したマタニティハウス第2号の開所式
(IPPF ザンビア、マサイティ郡保健局、ジョイセフ)



マタニティハウス設計に関するワークショップに熱心に参加するSMAGメンバー

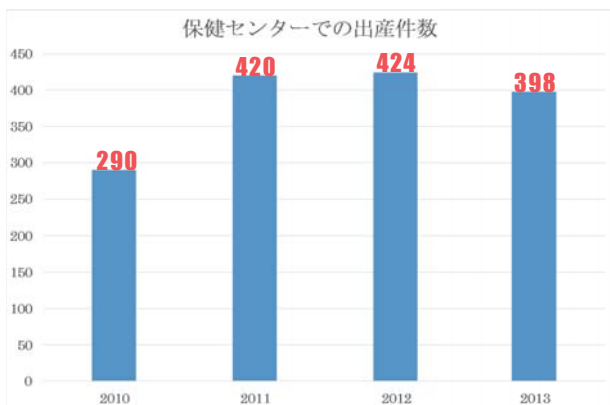


マタニティハウス第2号完成 (設計・デザイン協力 遠藤幹子)

成果

施設での出産件数が増えました。

- >> マタニティハウス第1号が2011年8月にオープンしてから、2013年12月末までに648名の妊婦さんが利用し、隣の保健センターで出産の介助を受けることができました。
- >> 施設での出産が2010年の290件から2013年の398件に増加しました。



保健センターで生まれたばかりの赤ちゃん



SMAGメンバーたちが安全な出産をテーマにした歌で啓発教育活動

| プロジェクト地区における保健指標 | 2010 | 2011 | 2012 | 2013 |
|----------------------|------|------|------|------|
| 産前受診件数 | 445 | 462 | 473 | 486 |
| 産後受診件数 | 277 | 358 | 440 | - |
| 家族計画の実行者数 | 181 | 314 | 397 | 492 |
| 保健センターでの出産件数 | 290 | 420 | 424 | 398 |
| マタニティハウス第1号に滞在した妊婦の数 | - | 71 | 287 | 290 |

< マタニティハウス滞在の妊婦さんの声 >



マタニティハウスに滞在するブルンスさん、フリダさん、エステラさん

ブルンスさん (20 歳)

「出産は初めて。SMAG (母子保健推進員) に教えてもらい、11 月のマタニティハウスの開所式にも参加しました。自宅から 1 時間歩いて到着、マタニティハウスには 1 週間滞在中です。家にいると家事をしなくてはならないのに、ここではリラックスして休めるし、初めての出産だけど、看護師さんや SMAG (母子保健推進員) の女性もいつも近くにおいて、一緒に滞在している先輩ママから出産についていろいろ聞けてとても嬉しいです」

フリダさん (35 歳)

「4 人の子どもの母親で、今回 5 人目。最初の 3 人の子は自宅で出産しました。自宅から 2 時間歩いて、マタニティハウスに来て滞在 6 日目です。隣の保健施設に看護師さんがいるから、すぐにチェックしてもらえて安心です。きれいなお水でシャワーも浴びられるし、とても快適です」

エステラさん (24 歳)

「3 人の子どもの母親で、最初の出産は 17 歳の時。両親と 45 分歩いてマタニティハウスに来てから 8 日目です。何か起きても隣に施設があるから安心です。こんなにきれいな家でリラックスして出産を迎えられるので、とても感謝しています」

< 物資による支援 >



- 出産したばかりのお母さんに赤ちゃん本舗支援による赤ちゃん肌着を寄贈
- JKA 支援による再生自転車に乗って家庭訪問活動などを行う SMAG メンバー
- 5 歳未満児健診に参加したお母さんにそごう・西武支援による子ども靴を寄贈

< SMAG メンバーから一言 >

エドクシア・ムウェマ (44 歳)

「安全な妊娠や出産に向けた知識について多くの学びがあり、コミュニティでの活動にとっても役立ちました。マタニティハウスが出来たことによって施設出産を促しやすくなりました。また、赤ちゃん肌着や子ども靴、施設で出産に必要な消毒液、ゴム手袋などの提供も施設で出産する大きなメリットとなりました。」



エドクシアさん

モゼス・ムオアンガ (48 歳)

「コミュニティの女性たちは、これまで陣痛後に 10 キロ、20 キロの遠い道のりを歩いていましたが、マタニティハウスが出来たことにより、出産予定日前にマタニティハウスに来て安心して出産を迎えられるようになりました。」



モゼスさん